

# 心理・保育系学部生に対する大学内の発達支援臨床の トレーニング・プログラム(2)

## —学生の支援スキルの習得と子ども観・スペクタクルな障害観への変化—

○鈴木はるみ

長崎 勤

(北海道医療大学)

(実践女子大学生生活科学部)

KEY WORDS: 心理・保育系学部生 発達支援臨床 トレーニング・プログラム

### Ⅲ. 結果

1. A 児の発達支援:A 児は、運動、認知・言語、音楽、おやつ活動、家庭課題、保育園でのコンサルテーションを通して、着実に発達して行った。特に家庭でのお手伝い活動を始点・基点とし、様々な活動のフォーマット・スクリプトを習得し、そこでの伝達意図理解、意図伝達、言語の意味理解・表現、自己理解が進んでいった (Nagasaki,2016; 長崎・鈴木,2017a,b)。

2. 学生の学び:3 年生 7 人、4 年制 8 人の年度末の振り返りの記述の分析から、以下が示された。

1) 3 年生:臨床 1 年目の 3 年生では、アセスメントや指導方法についての「支援スキル」の学びの中カテゴリーに含まれる項目が 43%みられ、「A 児の障害特性」についてのネガティブ・ポジティブ面からの気づきが 28%みられた。一方、事前に持っていた障害児はかわいそうで、助けてあげなくてはならないなどの「障害児観」が覆されたといった「障害児観の変化」の記述が 29%に見られた。

2) 4 年生:臨床を 2 年間経験した 4 年生では、3 年生と同様な、「支援スキル」「A 児の特性」の学びの記述に加え、2 年間の対象児の成長を目の当たりに見ることで、「ゆっくりで、特性があるけれど、ひとりの子ども」であることを実感し、人間観や社会観が大きく変わった、今後の社会の在り方への提言などの「人間観、社会観、価値観の変化」についての学びが 20%見られた。また、そのことによつて、自分自身の成長を感じることができた、子どもに会うことが楽しみな自分を感じることができたなど「自己の成長」についての記述が、18%見られた。その他、学びが大

Table 1 4 年生 X さんの記述

A ちゃんとの出会いは私の価値観を大きく広げることにつながりました。わずか 3 歳のダウン症児のごく小さな成長に私たちは一喜一憂し、たくさんの試行錯誤をくりかえしました。そして、その感動を A ちゃんの家  
族、先生、学生、企業、保育現場、様々な方たちと共有してきました。その意味の大きさは計り知れず、今後の日本の障害児(者)支援のあるべき姿だと感じざるを得ません。その中で A ちゃんを通して障害児にとってこの社会はどう見えるのか、支援とは何なのかを考えさせられました。

障害児のことを考えるべきなのは福祉の現場だけでいいのでしょうか。少なくともこの臨床で関わったのは福祉の現場だけではなく。社会全体が当事者意識を持たないといけないと思います。さらに A ちゃんは様々な出会いももたらしてくれました。A ちゃんとの出会いが他のたくさんの人との出会いにつながり、様々な価値観との出会いにつながりました。A ちゃんには感謝してもしきれません。

人の関わり方によって、子どもの行動が異なることの実感が持てたといった学びも多く言及された。

### Ⅳ. 考察

月 2 回、1 回 4 時間程度のトレーニング・プログラムを 3 年生は年 15 回、4 年生は 2 年間に 30 回受けることによつて、3 年生では発達各領域のアセスメントや支援スキルの修得だけでなく、障害や特性はあるが、「ひとりの子ども」なのだという、スペクタクルで多様性を持った子ども観、障害観の変化を学んでいた。また、4 年生では保育実習や就活等の経験も加わって、3 年生での学びに加え、大きな枠組で、障害者の生きる現代社会全体の在り方を捉える力、また自分自身をメタ的に捉える力も育っていったといえる (Fig.3)。このような人間観・障害観・社会観への気づきを学生が持てたことは大きな意義があると考えられる。新たな学びの人間観・社会観は福祉・教育分野にとどまらず、一般企業で働く学生の場合にも障害者への理解と支援に貢

献するものと考えられる。またコスト・パフォーマンスの観点からも効果的な教育であると考えられる。

(SUZUKI Harumi, NAGASAKI, Tsutomu)

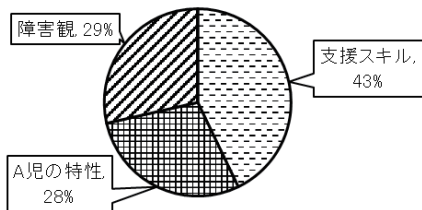


Fig.1 3 年生:臨床活動で私が学んだこと

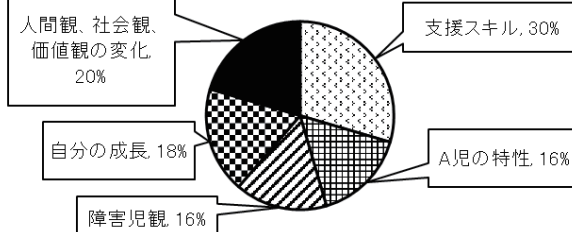


Fig.2 4 年生:臨床活動で私が学んだこと

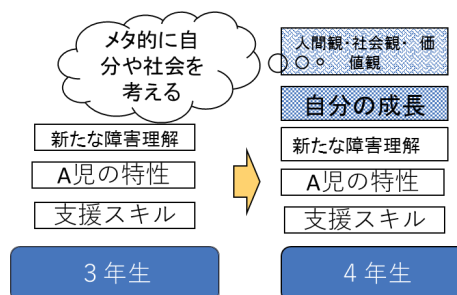


Fig.3 臨床での学びの変化